

職業と教育

職業教育研究会編集

二
月
号

目 次

- ・生産面を忘れた日本の教育（巻頭言）
- ・職業指導の問題点……………後 藤 豊 治…(1)
- ・職業指導の実際運営……………古 屋 正 賢…(7)

海外資料

- ・ポリテフニズムの動向……………長谷川 淳…(20)
- ・冬期研究協議会の記……………(17)
- ・研究コースの決定……………(18)

生産面を忘れた日本の教育

日本の教育ほど妙な歩み方をして来たものは、他の国ではあまり見られないようである。

まず教育の体系は明治維新に始まったといえるが、わが国自体が一日も早く欧米諸国に追いつく必要があつたために、急いでその学制と教育内容を直譯的に模倣したかと思えば明治二十三年には、これこそ日本教育の柱だとして、およそ時代とは逆行する封建思想のエキシミたいな教育勅語をもつて、コンクリートのような蓋をし、軍国主義の段階に入るや、これに呼応し、学校は忠君愛国の精神的工場と化した。

○ 第二次世界大戦による敗戦で、その蓋がとられたのはよいが、今度は教育の民主化をお題目みたいに唱え、マッカーサーの言葉ではないが、「勝者へへつらう」表面的な人権尊重から、何でもあちらさんのことをとり入れる植民地教育にまで墮落していった。

そして独立したといつて（実はそうではな

い）日本的なものとして、国民道徳実践要領だの修身の復活をいじたりする。どこに新生日本の教育があるかと問いたくなる。

○ それでいて教育の実態は旧態依然、めざすところは、いかに人間を育成するかということより、いかに要領よく上級学校へ進んで、卒業証書を握るかというコースは、昔とあまり変つていない。

そして、どの教科の内容を見ても、そこに一貫しているものは、以前の封建道徳においてこそなければ、生活に結びつけて取り上げられていたものは、ほとんどが消費面のみである。それを知識として要領よく掴むことにつとめているのである。

○ 生活を通して、原理を理解させようとする教育方法が、つめ込み主義教育に代つたことは、旧来の正しつけ教育への批判として認められるが、安易にそれを取り入れて、基礎学習がさつぱりおろそかになつてしまつた事は

疑うことのできない事実である。

○ そして日本を支え、日本民族が自立するために欠くことのできない生産面は、ここでは全く省みられていないのである。算数を見よ、国語を見よ、理科を見よ、社会科を見よ。その教科書の一つをとつて見たら、生産とそれを支えている人たち（働く人）の肉となり血となる教材があまりにも少いのには驚くであらう。

教材が少いだけではない。教育の方向がてんでそれに関心が持たれていない。これで生きた社会に出て、将来の日本になり、自立日本の青少年の育成が、全うできるであらうか。

○ もとよりそれは政治における文教政策の貧困に由来するのではあるが、或いは意識的に生産面を除外しているのではないかとさえ疑いたくなる。それは軍国主義による教育の歪曲と同じように、教育の全き人間形成を阻害しているものといえよう。改めてアメリカにおけるインダストリアル・アーツ、ソ連におけるポリテフニズムを日本の立場から見なおす必要があるのではないかと思う。（池田生）



職業指導における問題点

後 藤 豊 治

中学校における職業指導の現実態に目をすえながら、そこに横たわっている緊要な問題点をささえ、その各々についての見解をのべてみたい。

一、職業指導と職業・家庭科の関連

一体職業指導と職業・家庭科の関連はどのようにつかまれているだろうか、このつかみ方にはかなりな混乱があるように思うがどうだろうか。筆者は現職者の学位認定のための通信教育で、青年心理と生徒指導を担当しているのであるが、職業指導についての課題報告を求めると、職業指導即職業・家庭科との理解に基いた報告を受けることが二、三にとどまらない。また中学校の教師諸氏にこの関連についての見解を求めると、当惑げな顔をされ、はつきりした回答がえられないことがしばしばである。このようなはつきりしない関係や同一視は何からくるのだろうか。単に教師だけの責任だろうか。実はこのような受取り方は、直接には新しい職業・家庭科の学習指導要領が生みだしたものだと思う。

それは主として職業・家庭科における仕事の学習に啓発的経験の意義をことさらに附与したことに由来している。「このいわゆる仕

事は学習指導要領によれば、啓発的経験の意義をもつものである。これは職業・家庭科の第二の性格として示されているところであつて、この点は大いに着目に価するところである。」（野口彰・

「職業指導と啓発経験」職業指導十一号 六ページ・傍点筆者）という理解のしかたこそ注意に価する点ではなからうか。なぜなら、職業・家庭科における仕事の学習にだけ啓発的経験の意義を特に強調することは、職業・家庭科のあり方をかえつて混乱に陥れると同時に、職業指導の運営を要領を得ないものにしてしまふ結果を生むといえよう。生徒の生活経験はすべて啓発経験としての意義をもつ生活経験は統整された経験でないから眞の意味での啓発経験とはいえない難いと反論されるならば、すべての教科学習における諸経験は統整された経験であり、それは啓発的経験であると答えれば足りる。職業・家庭科の仕事の学習における諸経験は、他教科における学習経験に比して幾分かの重みのちがいはあるかもしれないが、要するにそれは他教科における学習経験と同列にあり、啓発的経験の一部と考えなければならぬ。

上述のように職業・家庭科における学習経験にのみ啓発的経験の意義を強調することが、職業指導と職業・家庭科とのかわりを不

当に密着させ、そこに関連のわかりにくさや混乱を生んだといえよう。現実には職業・家庭科即職業指導の考え方を生み、職業・家庭科教師に職業指導のすべての責任が負われ、職業指導の組織や任務の偏在をきたし、あるいは他教師の職業指導への参与の関心を低下させるなどの結果を生んでいる。この傾向は全校的な組織と、その組織を通じての全教師の参与と協力がなければ決して効果をあげえない職業指導に大きな欠陥を導いてしまった。

筆者の観点から兩者の関連について整理してのべておこう。普通教育における職業・家庭科が教育内容としてとり上げるしごとは、実生活に役立つ仕事や啓発的経験の意味をもつた仕事などではなくて（それは結果において言えることだ）、現代的生産技術領域への展開を可能にする基盤としての基礎的技術を含んだ仕事でなければならぬ。（上述の観点は既発行の本誌や、岩波講座「教育」第五巻 職業科——において清原道壽——に詳述されているから参照されたい。）このような観点にたつて編成されたしごとの学習における経験は、啓発的経験の意味をなすこととはもち論であるが、それだけが生徒の自己認識に貢献するというものではなく、他の教科学習における諸経験や特別教育活動などにおける諸経験と相俟つて、より一層自己認識を発展させることができる。すなわち職業・家庭科の教師と同じように、他教科担当の教師や特別教育活動指導担当者も生徒の自己認識を発展させるための助言・援助の機会と任務をもっているわけである。このような関係は、職業生活および自己についての正しい理解を得させるための職業指導的インフォーマーシヨンの提供についても言いうる。職業・家庭科においては、学習した基礎的技術がくみこまれていく職業生活、産業社会についての理解

をたすける社会的経済的知識の提供で充分であらうし、その程度は余裕しか得られないはずだ。より広い職業生活についての知識提供は他教科や諸々の活動部門が分担しなければならぬところである。職業人としての望ましい態度・習慣の形成も全く同様である。職業・家庭科は上述したような仕事の学習をとおして職業人としての望ましい態度・習慣を形成する任務をもっているが、他の教科や活動部門においても、それぞれの学習活動をとおして、よき職業人としての態度や習慣の育成が期待される。現に普通教育における全領域がかかる形成を行っていると考えるればおかしいことになる。こうして個々生徒に対しての総合的な助言・援助を果すべき重要な直接的責任者がホームルーム教師でなければならない。

要するに、職業・家庭科の職業指導へのかかわり方は、本質的に他教科や特別教育活動と同列、あるいは同じ意味あいにおいてである。このかかわり方をあいまいにしているものは、職業・家庭科におけるしごとの学習にだけ啓発的経験としての意義を強調しすぎることにある。

二、職業指導の対象

学校における職業指導の対象が、生徒であることは自明のことである。あえてここにこのことをとりあげたのは、つぎのような現実態をみとめるからである。それは、ほとんどが進学者だから職業指導は大してやつていない、とか、進学者以外はほとんど自家業への就業者か縁故就職者ばかりだから、職業指導をやる余地がない、などの声をきくことである。これは「進学者には職業指導の配慮は不要である。」「自家業就業者への職業指導は不要である。」さらには、

「少数の就職者たちへは指導の手をぬいている。」と表明しているのに等しいことではないか。果してそれでよいのだろうか。

まず進学者の場合をとり上げてみよう。窄き門通過の比率を向上させるために、成績区分による、あるいは家庭の経済条件や親の要請におさされての割当制が横行していないか。入学率が低いと学校の評判がおちるから、というだけのことなら、何とわびしい教育のすがたではなからうか。この場合、生徒や父兄の中に上級学校選択の基準を漸次成熟させる努力をすることこそ、学校の指導の機能ではないだろうか。自己の能力・適性を職業の要求するところと照合させてみることに、えらぼうとしている学校コースが将来の希望の進路に適切であるかを考えさせること、経済的條件の勘案、上級学校調査の結果見出された諸條件についての熟考など、生徒の自己決定を助け、賢明な自己指導可能な域にまで成長するよう援ける努力を放棄したのでは、強制割当に伴うトラブルや苦惱、入学後の思いがけない見こみちがいと失意などが徒らにくり返され、生徒自身による自主的問題解決など望みえないだろう。かかる先立つ指導が十分なされた上での入学準備指導なら現状においては目をつむつて認めるよりはかあるまい。

つぎに農業従業者について考えてみよう。最も放られがちな農業従業者について見れば、そこには二つの重要な問題がある。それはかれらは積極的に熱意をもつて農業に入っていくか、ということと、かれらはそれつきりその土地で農業に従事して一生を終るだらうか、ということの二つである。しかたなしに入っていく農業、そしてそこで余りにもみじめな生活と打開困難な壁を見出し、ひとりひとりの抵抗ではすぐ打ちのめされ、無氣力と忍従、耽溺と無頼に

おちいつていく。このような壁が何であるかについての理解、それはどうすれば打開できるかについての知識、能力、態度、意欲を養うことは学校の任務ではないのだろうか。山びこ学校の生徒たちが身につけたような力（ひつくるめて直截に力とよんでおこう）を育てることは、職業指導の任務外であろうか。それは社会科の任務だなど繩ばりを尊重することは逃避以外の何ものでもない。

第二の点については農村における二、三男対策の声がやかましいことでも否定できる。かれらの多くは結局のところ就職希望者にはかならないといえる。開発青年隊というよりな二、三男対策の本質を見ぬくような力がまた職業指導の成果として得られていなければならぬ。とすると、地域における二、三男のゆくえについての調査資料もたずに、かれらに職業指導は不要であるとする態度は意図以外の何ものでもないと言える。

縁故就職者に対しては指導の手をぬいてよいことになるだろう。筆者はむしろ逆だといいたい。かれらの多くが落つくことになる「家族的」を標榜する会社、工場、商店などこそ、最も深く鋭い理解を得させておかねばならない職業社会だと考えてよいからである。また縁故就職の中にはしばしば人身売買に等しい雇用関係が見られることが報告される現在、なおさらのことである。

以上、教育実践現場が往々にして軽視しがちな対象領域における指導の必要性について大略ふれてみた。この点についてはさらに五の「職業生活に関する社会的、経済的理解の達成」においてもふれることになる。また以上にのべたことは、職業指導即職業相談およびあつせんであるとする考え方と重要な関連があるから、つぎにこの問題にふれてみよう。

三、職業相談およびあつせんににおける問題

職業指導計画をもっているところは、文部省の調査結果（職業指導、十一号、十ページ）にかかわらず、筆者の知る限り意外に少いように思う。計画にしたがつて実施している学校に至つてはなおさら少いといえる。ただ職業指導年次計画はなくとも、ホームルーム指導計画をもっているところはわりあい多い。この場合も計画にそつて実施している学校は少く、しかもその計画なるものがほとんど画一的模式的なのに驚く。きまつたように中学三年の二学期末から職業指導的な計画があらわれ三月に終つてゐる。つまり筆者の入手しえた年次計画のほとんどは職業指導即職業相談およびあつせんの考えであるように疑われる。あるいはそれまでの職業指導的措施は職業・家庭科が果すべきことで、ホームルームにおける指導のあずかり知らないところだとの考えかもしれない。いずれにしても、「ホームルーム指導における職業指導的要素の充実」（職業指導、十一号、中村要）にあらわれているようににはつきりした観点になつてホームルームの指導が計画されることは少い現状である。結局三年の卒業前に泥縄式の指導がなされる実情が多く、それはむしろ指導とはよべないおしつけに終つてゐるといへよう。

職業指導も他の領域における指導と同じように、「児童生徒の自己実現を、かれら自身の自己決定を基礎として、構成的に援助していこうとする連続的過程である」（新教育事典三十五ページ）とすべきである。われわれはこの定義が含んでいる構成的援助→自己指導ということを重ねなければならぬ。卒業前における直接的指導段階が効果的であるためには、先行するながい段階の指導が構成

的になされてきていなくてはならない。そして卒業前には、新しい情報や事態に応じて、賢明に自己決定できるようになつていなければならない。したがつて卒業前の援助は、最後の調整を促すという意味合いのものであると考えてよい。ところが現状はそうでなく卒業期前にことあたらしく相談が開始され、結局のところおしつけや強請を行わざるをえなくなつてしまふ。またこのような現状である限り、進学者、家事従事者、縁故就職者などが指導相談の埒外に放り出されてしまふことも容易に推測できる。

四、補導について

補導は一面アフター・ケア (after care) の意味をもつとともに、フォローアップ・スタディ (follow-up study) の意味をもつものと考えなければならない。（わが国でよく引用されるマイヤーズの職業指導分野のわけ方に従えば前者が追隨指導または調製サービスであり、後者が調査サービスに相当しよう。）生徒の人格性の発達に連続的なものであるからと、とくにことわらなくても、過去のすがたをよく理解しているものが、その成長を見守つて、卒業後の追隨指導を担当することは適当でもあり義務でもあらう。いや、それより一步をすすめてつぎのように考えなければならないのではないか。

助言、援助

職業知識の提供
（職業相談、あつせん）
……生徒の自己決定→補導
（フォローアップ、ガイダンス、フォローアップ・スタディ）

右の図式に即してのべてみよう。相談助言によつて自己決定可能

の域にまで発達を助け、自己決定をなさしめ、一定の方向をとらせたいということは、かかる方向が本人の資質、その他の条件からみて適切であるとの判断がなされたことをいみする。この判断はその後の職業生活、学校生活における実証をまつてはじめて適否が判るといふ性質のものであり、それは一種の仮説設定である。とすれば配置（このことばはどうかすると他律的な意味にとられ易い、就職、進学といつておいた方がよいかもしれない）後の生徒の様子を詳細に見とけることはとりもなおさず一つの検証を行つていふことである。つまりこの生徒にはこの方向がよろうと思つてすすめたことだが、果して望ましい発展を上げていふだろうか。何か思わぬ困難に逢着してはいないか、その困難あるいは問題を賢明に処理、解決しているだろうか、その観察・調査し、問題に当面して解決できないでいるならば適切な助言、援助が必要だし、調整が必要にならう。すなわちこれは仮説の検証部分であり、これを放棄することは指導が未完結であることを意味する。

上述のように仮説設定→検証の過程をくり返していくことを指導における科学的態度だと思ふ。この検証はやがて仮説の修正、いしかえると生徒を職場や学校におくりこむまでの学校教育におけるカリキュラム、あるいはガイダンス・プログラム、指導方法の評価、改善を可能にするものだからである。さらにそれらの計画が一定の方法をもつて達成しようとしている教育目標へのきびしい反省にかへることできる。ところが現に卒業させるまでの指導にはかなり熱心である学校でも、補導への熱意は案外低いように思ふ。一体補導調査結果を整理し、吟味して教育計画や方法の改善にまで役立てている学校がどれ位あるだろうか。多くは実働性のない模式的

プログラムが惰性でおしすすめられているのが現状ではないだろうか。

もしそうでなかつたら幸である。とくに生徒が卒業後進む職業社会や学校の指導的機能がまことに手りすなことを考えると、この必要はますます大きいように思ふ。

五、職業生活に関する社会的、経済的理解の達成について

順序からいえばこのあとでふれなければならなかつたことかもしれない。重要な問題であるから、ここでとり出してのべておきたい。このことは職業・家庭科の任務だなどと言つてはいけない。学校教育のあらゆる部面と機会において達成がはからなければならないことだし、それが渾然一体となつて生徒の職業社会認識を助けるものでなければならぬ。

この職業生活についての社会的、経済的理解がどのような面で達成されなければならないかを二、三の具体的事例をひいてのべることにしよう。最近のある地方新聞記事を例にとつてみよう。その記事によれば、来年三月卒業する中学生の就職をめぐる、求人側職安側は「学校における最近の教育はやたらに労働時間とか労働賃金といった理屈ばかり覚えこませて、使用者から煙たがれるので教育方針をかえてもらいたい」「……どんな労働にも耐えられる人間教育に重点をおいてほしい」とのべている、求人側が求めている教育方針とか人間教育とかは一体何を意味しているか、この記事では明らかでないが、つぎの例と言うところを同じくしていると考えて間がないだろう。二、三年前のことになるが、東京のさる中学校

のP・T・A幹部であり、有力な卒業生受け入れ者である、ある町工場主が学校の協議会でつぎのようにのべるのをきいたことがある。「とに角、六・三制とかで、中学校ができたことはかえすがえすも残念なことである。昔なら小学校をおわるとすぐ親方のところへ弟子入りして、理屈なしにみつちりきたえられ、人間もうでもできたものだが、この頃ときた日には理屈ばかり多くて、役に立つ人間にはなりはしない。学校ももつと虚心になつて働く生徒を育ててもらわなきゃいけません」と。この町工場主は現在の風潮にのつて、尙一層この主張をまくし立てて、学校側へ「社会の要求」をもちこんでいるのではなからうか。これが何につながるものかは、宮原誠一氏の考察（岩波講座「教育」第三卷「産業と教育」）が示しているように、制度改革や法制定のための審議会においてあらわれているところを見ればよい。それは端的にいえば「知らしめない」教育であり、したがつて批判なく、不満なく、現実肯定の中に安住しきるような人間の育成ということであらう。

われわれは「教育とは社会がもつところの自己更新の機能なり。」との立場にたつべきである。職業生活に適応できる人間というのを職業生活に順応できる人間の意にとつてはならない。自己が所属した職業社会（一般的には社会環境）を内面から改善、改造して、この新しくつくりかえられた社会の中で充実した有為な生活をおくるような人間の育成こそ、まさしく自己更新の機能とよびうるのではないか。リフォーミング・アクティビティを可能にする知識、理解技能、態度とは何か、それらはどのようにして育成できるか、これこそが指導の当面する重要な眼目ではないだろうか。（大分大学助教授）

新刊予告

大分大学助教授 後藤豊治 共著
宮城県指導主事 小野禎一

職業指導新論

（定価未定）

職業指導について、長年に亘り実践し現在指導的立場にある両著者が、それぞれの見地から世に問わんとする野心的著作！

都市における職業への指導はいかにあるべきか。農村二・三男問題に直面して、いかに施策すべきかを解明した本書は、中学校における職業指導に、直ちに役立つ指導書たり得るであらう。

発行所

東京都中央区銀座東五ノ五

立川図書株式会社

中学校における

職業指導の運営について

甲府市立西中学校教諭

古 屋 正 賢

中学校における職業教育の重要性が叫ばれながら、職業教育と職業指導についての本質的究明がなされているだらうか。両者はややもすると混同して考えられ、或は職業指導は就職の斡旋で事足りるように誤解されてはおらないだらうか。本校においても昭和二十二年以来、この問題について、いろいろと悩んできた。

職業教育は将来の生活における、共通的な、しかも職業的一般的な基礎的知識や技能を身につけるものだとその内容を進めてみたときに、職業科において職業指導の全分野を担当することの無理なことを、まぎ／＼と目の前に見せつけられた。それから本校としては「職業指導は如何に扱うべきか」という問題が全領域の中に浮び上つてきた。そして職業指導は、一職業科や社会科の一分野として取り扱うべきものでない、学校全体計画としてのガイダンスの分野において取り扱うべきものであるという結論を得た。

教科としての職業指導は適性発見の段階に到達すれば、以後の進学就職に関する資料の蒐集相談などは学校の全組織をもつて行う職業指導の分野において担当するものとし、そのためには、学校職業

指導の組織が必要ということで、次のような組織が構成された。

一、職業指導組織表

本校の職業指導組織はつぎのようになっている。

校長（教頭）

職業指導委員会（職業指導主任）

委員——教科主任・学年主任・保健主事・生活指導主事

・特別教育活動主任・図書館主任・クラブ活動主任

任務分掌——企画及庶務部・職業情報蒐集・調査部・進路相

談部・就職進学指導斡旋部・職業補導部

職業指導部会

教科部——国語・社会・数学・理科・音楽・図工・保健・

体育・職家・英語

学年部——一学年部・二学年部・三学年部（ホーム・ルー

ム）

特教部

保健衛生部

図書部

クラブ活動部

職業指導組織を構成するにあたって、つぎのようなことを基本的な考えとした。

- (1) 職業および学校の選択能力を養うことは人間生活における最も大きなことがらで、中学校は義務教育の最終段階である。このことに関する内容が、より効果的に進められなければならない。おそらくこのことは、学校教育の結論的な仕事ということができよう。
- (2) 職業指導は広範囲の内容をもつものであるから、全教師の参加が必要である。

(3) 教科指導が職業人への基礎教養を目標とするので、教科教師は職業指導における重要な役割をもつものである。このようなことをもとに、中学校では職業指導の組織として、ホーム・ルーム教師を基礎とし、教科教師を加味した性格の職業指導組織をとるべきである。

以上の考えで組織をつくり、この組織をもとに年間計画の立案や全般に亘る運営をする主任を設けることがぜひ必要である。この主任にはカウンセラーが当ることが望ましいが、本校は生徒数約二千、学級数が三九もあるため、別に職業指導主任を設け、カウンセラーとの連絡をとりながら職業指導に関する一切を包括するようになっている。

二、職業指導のねらい

個々の生徒の職業選択の援助をすることとし、就職と進学の準備

と平行して考えていくことにした。そして具体的な目標をつぎの六つとした。

- (1) 各種職業および学校についての理解をもたせる。
- (2) 就職進学之机を理解させる。
- (3) 勤労愛好の精神を養う。
- (4) 職業および職業生活についての、よりよき研究態度を養う。
- (5) 自己の個性を自覚し、よい点の伸長をはかる。
- (6) 自己の内的条件に合った適切な職業を選択することのできる力を養う。

三、職業指導の仕事の概要

職業情報の蒐集、学校調査、個性調査、諸テスト、相談活動、職業安定所その他の外部との連絡、就職斡旋、補導の八つの分野に分けて実践している。

全教師の職業指導の分掌はつぎの表の様にきめられている。

四、職業指導年間計画表

指導主任が立案し、職業指導委員会において審議し、全職員会議において承認され、実践に移されたものである。ホーム・ルームにおける職業指導の指導相談計画表も同様で、他のテストや調査その他のことについても全教師がよく納得し、方法を十分に研究してから実践に移っている。その過程においては複雑な感じがするが、内容を全員が了承しているため、結果においては結局早く実践されることになる。

本校は学級数が多く、行事その他主として学年単位に運営される

指導分野	任務並に 分掌事項		委員 会	指導 主任	教科 担任	学年 主任	H・R・ 教師	職業 家庭科教師	保健 体育科教師	生活 指導教師	クラブ 活動教師	図書 館主任
	要 項											
計 面	1	職業指導年間計画	(委員はすべて職業指導主任の任務を分担する)	○		○						
	2	職業指導組織及分掌		○		○						
	3	関係機関との連絡		○								
	4	各学年連絡		○		○						
	5	各教科との連絡		○	○							
	6	特別教育活動との連絡		○				○			○	
	7	図書購入		○								○
	8	設備の充実		○				○				
	9	予算関係		○								
個 性 調 査	1	知能検査		○			○			○		
	2	興味調査		○			○	○		○	○	○
	3	職業適性検査		○			○	○			○	
	4	向性検査		○			○			○		
	5	環境調査		○			○			○		
	6	希望調査		○			○					
	7	身体検査		○			○		○			
	8	個人調査		○	○		○	○		○	○	○
	9	指導要録関係		○	○	○	○	○	○	○	○	○
	10	学力検査		○	○		○					
相 談	1	進学相談		○	○	○	○	○				
	2	就職相談		○	○	○	○	○				
	3	教科選択相談		○			○					
	4	職業実習に関する相談		○		○	○	○				
職業 情報	1	新聞、ラジオ、雑誌からの情報		○			○	○				○
	2	安定所、事業所からの情報		○								
	3	職場及上級学校からの情報		○								
	4	図書購入及び提供		○	○		○	○				○
	5	その他の情報		○								
幹 旋	1	職場開拓		○								
	2	安定所との連絡		○								
	3	P T A との連絡		○								
	4	進学幹旋		○	○		○					
	5	就職幹旋		○	○		○					
補 源	1	補導計画		○			○					
	2	補導記録		○			○					

面が多いので、年間計画表も学年のわくを入れて立案されている。

(編集子注) 年間計画表は印刷の都合上入れることができず、筆者に対しても読者の皆さんにも申し訳ありませんが不悪)

五、ホーム・ルームにおける

職業指導相談計画

職業指導の年間計画はほんの骨子であるため、これをより具体的内容にして、ホーム・ルーム教師が指導するのに便利なものにしたものが、つぎのホーム・ルームにおける職業指導相談計画である。

第七学年

月	時間	指導相談内容
4	2	1、中学校生活の計画 (1) 家庭環境調査 (2) 個人調査
5	3	(3) 進路希望調査 (4) 身体検査 (5) 職業指導講話(中学校生活の計画について) (6) 進路計画に対する相談
6	2	2、職業安定所より就職状況入手提供 (1) 就職者の就職地別調査結果 (2) 産業別就職人数調査結果
7	3	3、郷土の職業 (1) 市の産業統計資料の提供 (2) 市の職業分布調査と検討 4、テスト (1) 職業興味テスト (2) 学力テスト

3	2	1	12	11	10	9
2	3	2	3	3	3	3
20、選択コースの希望提出 21、選択コースの決定	17、職業指導講話(自己の内的条件の結合理解) 18、郵便局見学 19、選択コース決定に関する相談	14、知能テスト 15、標準学力テスト 16、選択コース決定に関する相談	12、職業指導講話 (選択コースはどれを選んだらよいか。) 13、進路相談	9、職業指導講話 (選択コースはどれを選んだらよいか。) 10、甲府学区進学希望者状況 11、進路指導票整理	7、職業指導講話 (選択コースはどれを選んだらよいか。) 8、甲府駅及び果樹栽培地見学	(3) 興味型(性格)検査 5、安定所及事業所の情報 6、農業試験所見学

第八學年

月	時間	指導相談内容
4	2	1、進路の選定 (1) 家庭環境調査の修正追補 (2) 個人調査 (3) 前年度卒業生の就職進学状況 (4) 選択コース変更に関する相談
5	3	(5) 進路希望調査 (6) 身体検査 (7) 職業指導講話（進路選定に必要な条件について）
6	2	2、職業定所より就職状況入手提供 (1) 就職者の就職地別調査結果 (2) 産業別就職人数調査結果
7	3	3、テスト (1) 職業興味テスト (2) 学力テスト 4、夏季実習計画に対する相談
9	3	(3) 知能テスト 5、安定所及び事業所の情報 6、バルブ工場見学
10	3	7、職業適性検査 8、職業指導講話（適性と進路）○自己分析 9、上級学校の情報 10、観光施設及び醤油工場見学

第九學年

月	時間	指導相談内容
11	3	11、職業指導講話（適性と進路）○適性と興味 12、職業適性検査 13、甲府学区進学希望者状況 14、進路指導票の整理 15、せいの工場の見学
12	3	16、職業指導講話（適性と進路）○進路の考察 17、職業適性検査 18、製菓製粉工場見学
1	2	19、標準学力テスト 20、進路相談
2	3	21、職業指導講話 （自己の内的条件と外的条件の総合理解） 22、みづほ牛乳見学 23、選択コース変更に関する相談
3	2	24、選択コース変更希望書提出
4	2	1、進路の決定 (1) 家庭環境調査の修正追補 (2) 個人調査 (3) 前年度卒業生の就職進学状況 (4) 選択コース変更にかんする相談

12	11	10	9	7	6	5
3	3	3	3	3	2	3
18、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 17、求人情報 16、製菓製粉工場見学	15、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 14、第三次進路希望調査 13、甲府学区進路希望者状況 12、進路相談票のせいり	11、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 10、職業場及び学校調査 9、第三次進路希望調査 8、甲府学区進路希望者状況 7、進路相談票のせいり	7、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 6、上級学校及求人の情報 5、果樹栽培地見学 4、就職進学相談	5、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 4、安定所及事業所の情報 3、鉄工場見学	3、職業指導講話（個性にあつた職業を選ぶには） 2、職業安定所より就職状況を手提供 1、就職者の就職地別調査結果 2、産業別就職人数調査結果	5、進路希望調査 4、身体検査 3、職業指導講話（職業の内容について） 2、職業安定所より就職状況を手提供 1、就職者の就職地別調査結果 2、産業別就職人数調査結果

3	2	1
2	3	2
29、就職進学に関する相談	28、就職相談 27、就職進学に関する相談 26、就職相談 25、就職相談 24、就職相談 23、就職相談	19、標準学力テスト 20、第四次進路希望調査 21、知能テスト 22、求人情報 23、就職進学相談

六、調査の実施状況

一、二、三年を通して四月のはじめに、生徒の状況および環境調査を別表（省略）のような形式で実施する。これは二、三年生は追補ということ、一年生は全部記入することになっている。なお、この表は甲府市の全中学校が同一形式で実施するように、ガイダンス委員会において統一したものである。

以前には家庭環境調査、個人調査などいろいろの調査が行われていたが、三年における就職相談表・進路相談表の記入のばあいはもちろん、学年ごとに全生徒の組み替えが実施され、受持教師が変わるので統一することの必要が生れ、このような形式の表を利用することになったのである。

就職希望調査集計票

〔昭和27年12月1日現在〕（3年合計）

職 業 分 類		男	女	計
a. 専門的技術的職業	1. 技術的従業者	23		23
	2. 教授および教師			
	3. その他専門的従業者			
b. 管 理 的 職 業				
c. 事 務 従 業 者		10	21	31
d. 販 売 従 業 者		25	35	60
e. 農夫、牧夫、伐木夫、獵師、漁夫及び類似従業者	1. 農夫、牧夫及類似従業者	9	2	11
	2. 伐木夫、獵師及類似従業者			
	3. 漁夫及類似従業者			
f. 採 鉱、採 石 的 職 業				
g. 運 輸 的 職 業		1	3	4
h. 特殊技能工、生産工程従業者及び單純労働者	1. 金属及金属製品関係職業	7		7
	2. 紡織関係職業		5	5
	3. 織物製品関係職業	2	10	12
	4. 木材及木製品関係職業	8		8
	5. 据付機関建設機械運転工及類似従業者	8		8
	6. その他特殊技能工及生産工程従業者	7	8	15
	單純労働者			
i. サ ー ビ ス 職 業	1. 家事サービス従業者	14	11	25
	2. 保安サービス従業者		5	5
	3. その他のサービス従業者	1	1	2
そ の 他		26	14	40
計		141	115	256
就職を希望しない者		249	149	398
合 計		390	264	654

七、就職希望の調査

昭和二十七年十二月実施したものの集計を、次表のようにまとめた。これは三年生の十二学級六五四名に対して実施したもので

ある。

その他進路希望調査（進学就職）、悩み調査など、一、二、三年間を通しての集計を個人別に記録するようになっている。

八、職業情報の提供

安定所その他の事業場から提供されるものは、職業指導委員会情報部において印刷替えして、各ホーム・ルームにこれを提供し、ホーム・ルーム教師が解説し、指導をしている。

また学校の情報担当教諭が本校及び他校の生徒の状況を調査集計し、校内情報として前と同じようにホーム・ルームに提供している。これらの資料は、校内各所に設けられた職業指導専用の掲示板に展示されている。

このほか本校では図書館主任が中心となり、書籍・新聞・事業各所の職業内容を蒐集し、図書館の分類によつて分類整理し、図書館において随時提供している。

校内放送施設もまた情報提供の役割を分担している。毎週のN・H・Kから放送されるものをテープレコーダーに録音し、校内放送の時間割によつて午後三時から三時半まで解説を加えて指導している。各教師が直接連絡される情報は、放送を通して提供されることが多い。これらの放送指導は西中学校放送委員会の教師と生徒によつて実践されている。

図書館における職業情報提供の実際については、機会を得て後日御紹介申し上げ、御批判を仰ぎたいと思う。

九、テストについては

時期と内容が問題になる。時期についてはホーム・ルーム年間計画によつて実施し、内容としては興味性格検査・向性格検査・人格性検査・職業興味検査・職業適性検査・標準学力検査・身体検査・

知能検査などを取り上げて実施している。それぞれについての具体的内容および結果については、紙数に制限があるので次回にゆずることにする。

十、職業指導に関する講話

これはホーム・ルームにおける職業指導の時間に実施している。その学年別の取り扱い内容については、前掲のホーム・ルームにおける指導相談表に挙げてあるもので、この表がホーム・ルームにおける指導全般ではなく、職業指導のみを列挙した部分的のものであることを補説しておきたい。

本校は昭和二十七年十二月五日、実験学校として日々の指導の具体的面の公開授業をし、広く御参会下さった方々の御指導と御批判を願った。その時の指導計画の一部を提供し、本校職業指導の実践内容を御想像願いたいと思う。

十一、職業指導の学習指導計画の例

1、職業指導公開当日における学習指導の一覧表
研究課題「中学校における職業指導について」（甲府市立西中学校）

2、進路指導講話実施案

選択コースはどれを選んだら良いか。

適性と進路（卒業に当つて個性に適した職業を選ぼうとするにはどんなことを考えたら良いか。進学について各高等学校の選択を自分の適職と合致させるにはどうしたら良いか）

3、適性検査実施案

4、進路指導（先輩高校生との進学に関する話し合い・就職した先輩との話し合い）

5、職業情報提供の実施案（中学校の卒業生はどのように進むか・N・H・K放送「食品加工」の聴取指導）

6、教科における指導（職業家庭科学習指導案・社会科学習指導案・理科学習指導案・図工学習指導案）

7、見学の指導（工場見学指導案・工場見学結果整理の指導案）
（指導計画表省略）

十二、職業指導研究会

本校においては、校内は職業指導委員会によっていろいろの研究が進められるが、学校と安定所・各種事業所・高等学校・父兄などをもつて職業指導研究懇談会をもち、どのように中学校における職業指導は進められなければならないかということを中心に、具体的内容や希望および就職進学についての協力を願っている。その研究会の状況を公開当日、参会者に御覧願った。

十三、進路指導票

生徒個人の資料は沢山あると思うが、相談の際校内のどの先生でも指導できるように次表のような進路指導票を、全教師が数回に亘る研究の結果作り上げ、実践しつつある。これまでいろいろな形式のものを使ったが、改善の結果現在ではこのような形式のものを使っている。

進路相談票（西中学校案）

（紙面のつごうで表示できないので、特色のある項目だけを示した——編集部）

一、学業成績にあらわれた特徴（一年）（二年）（三年）

1、学校の成績

2、好きな教科

3、きらいな学科

4、好きな仕事

5、きらいな仕事

6、教科にあらわれた特長

二、H・R・T・教科担任より見た性格

1、明 朗——内気・不平を言う

2、辛 強——普通・短気

3、勤 勉——普通・怠だ

4、正 直——普通・ふまじめ

5、親 切——普通・意地悪

6、人と協同出来る——余り出来ぬ

7、おちついてる——普通・乱暴

8、信用ある——普通・信用ない

9、器 用——普通・不器用

10、動 作——早い・おそい

三、テスト（知能検査・興味型（性格）検査・学力テスト・向性人格性検査）

四、診 断（どうしたらよいか）（二年）（三年）

家庭事情からみて・成績学力からみて・知能からみて・身体からみて・性格行動からみて・適性検査からみて・興味趣味から

みて・職業、学校の内容からみて・就職、進学の場合からみて
五、面接記録（月日）

附記——本稿には多数の表や資料が添付されていたが、印刷技術上困難なことから、頁数の関係で指導表その他を割愛したり原稿の一部訂正のやむなきに至り、十分その内容を伝えることができなかったのではないかと、その点筆者に深くおわびしたい。何卒御諒承ありたし。（編集部）

家庭科教育協議会

——三月廿七、八日の予定——

職業家庭科の一部としての中学校における家庭科の教育は、依然として古い型から脱しているとはいえない。では、どこに問題点があり、どこに注目すべきであろうか。職業教育と如何に関連すべきであろうか。重要問題は山のように積まれており、研究すべきことはあまりに多い。それについて、来る三月末休みを利用して全国の家庭科担任先生に集つていただいで協議したい。

詳細は次号発表の予定。（宿泊費負担す）

主催 職業教育研究会

中學卒業就職者を

めぐる希望と意見

愛知県の十五職業安定所が、昨春、中学校を卒業して就職した子どもたち約三万名と、その雇用主の声を集めた調査によると、もつとも多かつた「希望」はつぎのとおりである。

就職者の希望

(1) 雇主へ (i) 給料や労働時間は最初の話のとおりにしてほしい。条件をかえるばあいは、事前になつとくよくいように説明してもらいたい。(ii) 寄宿舎の生活にもつと気を配つてほしい。年長者にはずいぶん悪いことを教える者がある。(iii) 上との間違いや欠点は怒らずに教えてほしい。

(2) 安定所へ (i) 安定所の話と工場の実情とがくいちがつている。求人側の雇用条件を間違いないように伝えてほしい。(ii) 職業相談はもつとていねいにやつてもらいたい。

(3) 学校へ (i) 今後の卒業生のために職業科（実習・工場見学など）の時間をふやすとともに、各種の会社や社会の実情を教えてほしい。

雇用主の希望

(1) 就職者へ (i) しごととはできても、言葉づかいが悪くシツケと責任感に欠けた者があつて困る。

(2) 安定所へ (i) もつと責任をもつて就職者の紹介をしてほしい

(3) 学校へ (i) もつと社会常識を養う教育をしてほしい。(ii) 学校だよりで郷里の諸行事などを知らせるのはいいが、ホームシックを起させるような言葉づかいは注意してほしい。

冬期研究協議会の記

本研究会では、昨夏八月箱根において研究集会を開催したが、それにつづいて、冬期研究協議会を、十二月廿六、七日両日、東京都若葉荘で開催した。

今回は全国からエキスパートとして、実践的にも着々進めつつある実家を招集し、約二十名の協議員によつて開催された。定刻の廿六日午後一時には、続々参集され、一時三十分から協議員の紹介につづいて、地方の実践報告がなされた。

その報告の中に、実は多くの問題がふくんでいて、質問応答の間に、早くも熱心な討議となり、午後三時半に及んだ。それより別掲の研究コースについて、前文並に研究部門の審議が行われた。

夕食後も前記の研究コース決定についての熱心な討議が続けられ、極めて活潑な発言が展開された。午後九時第一日の幕を閉じて寝につく。

廿七日は、東京は本年になつて最も寒い朝。窓外に霜柱が立っている。午前八時まで

に朝食をすませた一同は、引きつづいて大阪大学後藤豊治氏の職業指導についての意見発表をきいた。時間の都合で十分話をきくことができなかったのは残念であつた。それより質問応答など漸く熱意をおびてきた頃、すでに見学に出発する時間がせまり、途中で端おるの止むなき状態であつた。

かくて一応研究協議会の幕が閉ぢられることになつたので、池田種生氏より閉会の挨拶があつて、午前十一時一同うちつれて石川島重工業株式会社の工場見学へと出発した。

この工場は造船工場であるが、われわれの見学の為めに特に便宜を与えられ、プリントなどの資料を用意して下さつた。

見学は鑄造工場から始つて、鑄鋼工場、機械工場、仕上工場、組立工場など、第三工場の現場を見学し、第二工場では、現図場、造船ぎ装、け書き、ドック、造機械工場、木工場、電気工場、製罐工場等、あらゆる工業技術面をくまなく見学することが出来て、非常に得る処があつた。

終つて四時から茶菓の接待をうけながら、同会社の教育課長から、工場における教育計画並に養成機関などについての説明をきいた後、質問応答等があつた。厚く礼を述べてそ

こを辭した時は、すでに夕やみがせまり、寒風が吹きまくつていた。

参加者名 (順席不同)

福島市福大附属中学校	佐藤政己
宮城県教育指導主事	小野禎一
茨城県多賀郡多賀中学校	舟橋隆智
栃木県葛生中学校	小幡喜春
同 島山中学校	小西 豊
群馬県小谷田中学校	根岸正明
神奈川県小田原第二中学校	石川勝藏
甲府市西中学校	古屋正賢
千葉県安房郡勝山中学校	峰 隆信
静岡県浜松市北中学校	鈴木 茂
京都府船井郡國部中学校	世木郁夫
大分市大分大学助教授	後藤豊治
東京都国分寺中学校	渡部俊雄
同 牛込第一中学校	高薄重夫
同 奥沢中学校	田中花子
文部省職業教育課	長谷川 淳
同 東京都教育庁	鈴木壽雄
東京 都 教育庁	杉山一人
国学院大学助教	清原道壽
職業教育研究会常任理事	池田種生

職業教育研究コースの決定に当たつて

職業教育研究会

一九四五年八月十五日世界第二次大戰が終熄してここに七年四カ月、その間わが国の諸般にわたる幾多の改革が行われた。しかし一面占領政策に基く植民地化の傾向が、政治・經濟をはじめ、教育の上にも著しく現われて來ている。また世界の情勢は再び戰爭の危機を想わせ、わが国の平和憲法の改正論、再軍備の論議が擡頭し、事實上全國到處に軍事基地が作られている。また産業も軍需生産への歩みをたどりつつある。

こうした客觀情勢に対して、わが国の教育は如何に対処すべきであらうか。徒らに時流に追隨して、教育の自主性を阻害されるままに委してよいであらうか。義務教育の最終段階である中学校における職業家庭科の教育は、産業との重大な関連性を持ち、また平和への連りを持つ点で、非常に重要性を持つてゐるといわなくてはならない。

然るに、この教科の出發は、文部省学習指導要領の方針からすでに混乱に陥入つてゐるばかりではなく、實際面においても、十分な設備と用意がなく、旧態依然たる学習内容に終始して來たため、或は方向を誤り、或は停止した状態におかれてゐる現状である。

この時に當り、わが職業教育研究会では、多期研究協議會に諮り、過去の研究実績を検討すると共に、今後研究すべき研究コースの体系を決定した。これらは、それぞれの研究部門を整理し、研究の題目を示したもので、その内容に至つては、各研究部門によつて細目にわたつて研究を重ねていこうとするものである。本研究會では、今後このコースに従つて研究していくことはいうまでもないが、各地支部または各學校で研究される場合にも活用されるよう望む次第である。

一九五二年十二月二十六日

研究コース

第一部 職業家庭部門

A、基礎部門

1、教育理論研究

- (一) 世界の教育思潮
- (二) 日本教育の系譜
- (三) 教育のめざす人間像の探究
- (四) 最近日本教育思潮と職業家庭科

- イ、平和教育と職業家庭科
- ロ、生産教育と職業家庭科
- ハ、基礎教育と職業家庭科
- ニ、生活教育と職業家庭科
- ホ、科学教育と職業家庭科
- ヘ、道德教育と職業家庭科

2、職業関係制度研究

- (一) 教育制度
- (二) 教育関係法規
- (三) 産業教育振興法
- (四) 教育行政と教育財政
- (五) 現職教育

B、職業部門

1、産業構造研究

- (一) 世界経済の現状と動向
 (二) 日本経済の現状と動向
 (三) 日本経済の地域構造
 (四) 日本農業と産業計画
 (五) 日本鉱工業と産業計画
 2、生産技術研究
 (一) 技術論
 (二) 職務分析と作業分析
 (三) 基本的ブロックの分析
 (四) 仕事の内容と構成
 3、教育課程研究
 (一) カリキュラムの構成法
 (二) 他教科との関連
 (三) 特別教育活動との関連
 (四) 都市の教育計画
 (五) 農村の教育計画
 4、学習指導研究
 (一) 技術学習の指導法
 (二) 技術学習の心理
 (三) 社会経済的知識の指導法
 (四) 学習評価の方法
 (五) 指導案
 (六) 施設と教具
 C、家庭部門（未定）
 1、家庭構造研究
- 2、生活技術研究
 3、教育課程研究
 4、学習指導研究
 第二部 職業指導部門
 A、基礎部門
 1、職業指導の原理的研究
 (一) 学校職業指導の系譜
 (二) 職業教育と職業指導
 (三) 生活指導と職業指導
 (四) 学校体系と職業指導
 (五) 教育課程における職業指導
 2、職業指導の基礎的研究
 (一) 労使関係の現状と問題
 (二) 雇用関係の現状と問題
 (三) 労務管理の組織と実態
 (四) 職場における教育訓練
 (五) 産業における人間関係
 (六) 産業不適応の実態
 (七) 適性検査法の検討
 (八) 勤労青少年の心理
 B、職業指導部門
 1、職業指導の経営的研究
 (一) 学校職業指導の組織と運営
 (二) ホーム・ルームと職業指導

- (三) 職業安定機関と職業指導
 (四) 進学指導と就職指導
 (五) カウンセラー
 2、職業指導の技術的研究
 (一) 個性調査の方法と利用法
 (二) トライ・アウトの意義と評価法
 (三) 校外実習の実施方法
 (四) 職業調査の方法
 (五) 職業相談の方法
 (六) 職業あつせんの方法
 (七) 進指導の方法

x x x

(備考)

家庭科研究コースについては未定ですが、三月末に予定している「家庭科教育研究議会」では、この問題を中心にうちだすつもりである。



ポリティフニズムの動向

長谷川 淳

去る十五日にソ同盟共産党の第十九回党大会が開かれ、一九五一年から一九五五年までの第五次五カ年計画に関する指令の草案が附議された。その全貌は他にゆずるとして、その草案の第四「国民の物質的福祉、保健および文化水準の向上の部門」の中に「社会主義教育において普通教育が演ずる役割をさらにため、中学校をおえる生徒が職業を自由に選択できるような条件をととのえるため、中学校においてポリティフニズムの教育の実施に着手し、一般ポリティフニズムの教育に移行するのに必要な措置をとる」ことが明記されている。そしてこの草案はそのまま指令として採決されている。ポリティフニズムの理論、歴史、その後の動向については、矢川徳光氏の著書や論文によつて紹介されているが特に第五次五カ年計画の一環として、中学校におけるポリティフニズムが重要な課題として問題にされていることは、われわれの中学校の職業・家庭科が日本の社会の現在や将来の課題に目を閉ぢて「実生活に役立つ仕事一般」や「のぞましい勤労愛好の精神」を強調しているのとは対比して極めて興味ある問題である。

この大会以後、ソ連の「教師の新聞」は毎号このポリティフニズムの問題をとりあげている。今ここに紹介しようと思うものは、

去る十月二十二日附「教師の新聞」に掲載された「ポリティフニズム教育と組織的研究」と題するキロヴォポリ州パヴルイシユ中学校長スホムリンスキー氏の論文である。

ソ同盟発展

のための第五次五カ年計画に関する第十九回党大会の指令に、中学校におけるポリティフニズム教育の実現に着手するという重要な課題が提起された。この課題を解決するためには、教師のポリティフニク的視野を高めることと、またこの教育の方法を改善することなしには不可能である。ここに、理論と実践の関連が最も明瞭に実現される。ソヴェトの学校に与えられた新しい課題は、組織的な研究に反映せざるを得ない。

各教育者集団と学校長はすでに今日、組織的研究の計画の中で、ポリティフニズム教育の課題に特別の注意を払う可能性がある。われわれの学校では、この方向に最初の第一歩を進めた。この論文において、われわれは組織的研究の再編成の経緯を分かちとするものである。

ポリティフニズムの教育には理論的側面と実際の側面の二つの面がある。ポリティフニズムの教育の理論的側面は、その実際の側面より

もはるかに明瞭にまた十分に、現行の物理、化学、数学、物理学のプランに反映している。そのために、すべての教師の集団がポリテフニズム教育の理論的基礎を深く研究しようとすることを決議したのである。わが学校の教師たちは教育ソヴェトの会議において「中学校の教科課程におけるポリテフニクの教科内容」というテーマについて、学校長の報告を聞き審議した。この重要な問題の研究に向つてすべての教師の集団が準備した。学校長は、物理、化学、数学、物理学の教科課程を徹底的に分析した。教師は、学年全体を通じての見学旅行および実験室作業の全体計画をたて、また生徒が熟達しなければならぬ実際の技能の総計のリストを作成した。学校長の報告の中に、ポリテフニズム教育の実現のための、現行的教科課程が与えている可能性があつた。

次に教師は 教科課程の中のポリテフニク的教育内容をいかに理解しているかを語つた。このほかに教師は、見学旅行の目的について自分の考えを述べた。かくして、ポリテフニズム教育の理論的側面の研究を、全学校の方策——教育ソヴェトの会議における問題の審議——から始めた。ここにすでに、研究の第一段階において、若干の実際の方策がたてられた。

研究の第二段階は、教科目委員会と組織的編成の会議である。教科目委員会の事業計画の中にも、教科課程のポリテフニク的教育内容の研究と関連した問題が持ち込まれた。しかし教科目委員会の会議で、教科課程は一そう深く研究されるであらう。例えば物理および数学の教師の教科目委員会では、次の諸問題を研究する。「七年制学校および中学校の物理の授業における内燃機関の研究」「物理のカリキュラムの中の電気測定器具」「電気測定器具を使用する実際の

技能」

これらの報告は、教科課程の個々の部門を明らかにし詳細にし、また七年制学校および中学校における実際の技能の到達目標を定めている。これは教師にとつて、生徒の前に提起されているポリテフニク的教育内容とその必要の範囲を明らかにするに役立つ。同様の報告が、物理学の教師の教科目委員会によつても計画された。

ポリテフニズム教育を実現するためには、見学、実験室作業、学校附屬地における実際の労働のような、教授方法の根本的改善が必要である。中でも、ある教師は、見学の実施にはプランを作ることさえも必要だと考えていた。ポリテフニズム教育の実際の側面と直接結びつくこの方法の改善の目的で、わが学校の教科目委員会は一九五二年度に次の問題の研究を計画した。「授業の組織の中における見学」「見学の計画をいかにたてるか」「見学における理論的内容の強化」「学校附屬地における課業」「新しい材料の研究に関する実験室作業」「反復に関する実験室研究」。見学、実験室作業、学校附屬地における課業のような方法の改善は、経験の交換や批判なしにはできないことを特に注意することが必要である。

物理学教師 組織的連合によつて計画された特定の問題は、農村の中学校の特殊な條件と結びつけられた。これまでの教年間は、学校附屬地の作業は、多が来ると共に中止されるのが通例であつた。これは、社会主義農業の先駆的な実験を促進させることから、教育を引き離すことになるものである。それは、冬には、肥料の準備および貯蔵、雪の保存、春まきのための種の洗滌等の高い收穫の基礎が弱がれるからである。このような分裂を避けるために物理学の教師は、自分の教科目委員会のために、冬期に次の

問題を研究することに着目した。「冬の肥料の仕入と貯蔵」「水分維持のための人工的な雪の保存」「果樹園における冬の作業」「秋まきの播種の冬の観察」。組織的な計画の中のこの問題の研究は、必要欠くべからざる実際的な技能を生徒に得させるものであり、また、学校附属地の実習の季節性を除くものである。また、これによつて授業や課外活動から組織的活動を除外するようになつてなくなつた。

過去数年の経験は次のことをものがたつてゐる。即ち、学校附属地の実際の作業および物理実験室の実験的作業の悪い組織の原因はその根本は教師の不十分な準備であり、部分的には現代農業生産の理論と実際についての貧弱な知識である。教師のポリテフニクの資格を改善するために、ポリテフニクの知識と技能を獲得する若干の方法に着目した。第一、四学級の教師の組織的な集団では、次のテーマの研究を行つてゐる。「土壌の精製」「農業植物の栽培についての簡単な作業」「畜舎における家畜の世話」。

各教師は、学校附属地において農業植物の栽培について生徒を指導するばかりでなく、一九五三年の春と夏に、若干の实地——播種のために土地と種を準備し、肥料をほどこし、種まき植物の世話をすること——を自ら履習する。この実習を伴う講義なくしては、初等学校の教師に必要なポリテフニクの技能の習得は考えもつかないことである。

物理の教師

の教科目委員会では、電気測定器具の使用、コルホイズ電化計画の作成、真空管受信器の調整等の実際的な仕事について教育の計画を学年にわたつてたてた。

博物学および化学の教師は、実習を伴う講義を実施する。温床で

苗を育てる。木の小片で境界をつくつていちごの茂みをつくる。一九五三年春に穀物や工芸作物に肥料をほどこす。コルホイズにおける輪作の場合の枯凋病をふせぐために化学的方法の利用を実際的に試験する。

これらの実際の作業は、教育ソヴエトの会議によつて確認された最少限である。これは、教師ができなければならないすべてのことを含むものでは決してない。しかしポリテフニズムの教育は、政治的な運動ではなく、われわれの活動の破却し難い部分であることを考慮している。実際の作業は、教師ボクテフニクの資格を高めるものである。各々の教師は、個々の実際的な課題を受けとつて、組織的な集合或は教科目委員会の指導者の監督の下にその課題を遂行するであらう。この課題を遂行する経過について教師の答を定期的に聴くことは教育ソヴエトの義務である。

農村の学校

の多くの生徒、特に七学年級の卒業生は、農業生産に入る。彼等には、農業労働の実際の技能を身につけ、コルホイズ生産の組織的農業構造に精通することが必要不可欠である。

残念ながら、このポリテフニズム教育の本質的な構成部分が、多くの農村の学校で全く無視されている。結果において、七年制学校だけでなく十年制の卒業生さえ、特別作業班や作業群について、コルホイズにおける労働の計算方式について、その支払についての觀念をもつていない。きまつたように、農村の学校の卒業生は、コルホイズ生活の基本的法律である農業協同組合の規則を知らない。この年度に、生徒はこの規則の基本的な趣旨を徹底して知ることができらるであらう。若い自然科学者のサークルにおいては、コルホイズ

の労働の組織の問題が研究されるであらう。サークルは労働の計算と支払の方式の研究に、特別な労力を捧げるであらう。春の休暇には、サークルの仲間は教師の指導の下に、播種の時のコルホーズ等の労働日の記入を行う。

労働の計算

方式の研究と適当な実習は、新しい仕事である。ここで教師は重大な困難に遭遇するであらう。教師が予めて準備しておけば、誤りを回避することができる。そしてこの準備には、組織的な研究が決定的な意義をもっている。わが学校の博物学の教師の教科目委員会が次の問題を研究する。即ち「コルホーズにおける労働の計算と支払の方式を、若い自然科学者のサークルの作業でいかに研究するか」「コルホーズにおける労働の計算のために、実際の作業をいかに実施するか」。

現在の教科課程における個々の欠点にも拘らず、これらの教科課程はすべて、各教師の集団に対して、ポリテフニズム教育の課題の実際のな解決に着手させている。教科課程のポリテクニクの教科内容の深い研究、ポリテフニズム教育と関連した個々の教授法の研究、教師のポリテクニクの資格の向上、この組織的研究の若干の問題は、現在学校に（課せられた）新しい問題である。

寄贈資料

産業教育プランとその展開 千葉県君津中学校
実践のすがた（研究報告第三集） 同 右

拾い話

産業教育振興法が施行され、それに基づき設備基準が中学校と高等学校についてそれぞれ発表された。それを見ると、一応もつともな設備がずらりと並べられ、数量も経費も明細に示されている。

ところが、これをよく見るとぜひ必要と思われる大きな設備や細かな工具がもれている。あんなに何回も現場の先生や学識経験者を集めてねりにねつた規準に、どうしてそんな粗漏があつたのか、まったくふしぎであつた。

先日、その当事者にこの点を質してみたら、その理由はつぎのようであつた。

「質は、われわれだけの最終案ではそういう設備が入つていたのが、豫算の関係で何十万円以上のものと何百万円以下のは全部削れという当局の指示であんなものになつてしまつた」と聞かされてきた。そしてさらに「あれはすでに省令となつたから、もう容易に改正はされないだらう」とつけたした。

現場の教育実践を振興するための方策が、このように何らの教育的視点をもちず、単なる予算の関係だけできめられたというカラクリを知つて、私は産業教育振興法の何たるかがわかつたやうな気がした。

産業教育の現状と問題

杉江 清編

この本は、文部省職業教育課の杉江課長をはじめ、一応指導の立場にある人たちの総執筆で、それだけに注目すべき書である。

何しろ四百ページに近い本で、全部読んだわけではないが、ところどころ読んだ所では現状を知るための統計や資料が、お手のものだけに相当豊富であると思つた。

○ 産業教育振興法は、産業教育を振興するために財政的な補助をするとして規定しているが、ではどんな産業教育をやるのかの点は、明かにされないままに暗中也さく形の形である際、職業教育課が総動員で本書を編まれたことはその方向を示す資料として意義深い。

だが編者である杉江氏が序文でいつているように「本書はわれわれの研究のささやかな成果であるが、諸問題に対する解答は、ここではほとんど示されていない」むしろ現状の方に重点がおかれているようで、問題という方はどうもぼやけた感がある。

○

第一章の「産業教育の理念と振興方策」は杉江氏の論稿で、かなり明確に今後の産業教育のあり方を、平和的民主的に推進するため、歴史的な観点から、広い視野に立つて述べてあるのは教えられる点が少くない。慾をいえば、更にそれを掘り下げる意味で、社会機構と産業構造の分析（資料と解説）の項目がもう一本はしかつた。

これは文部省という名の役所に望むことは立場上無理かも知れないが、それがバックホーンとなつて、あとの各章が問題点をえぐれば、一層得る所が多かつたであらう。所が以下の各執筆者がばらばらで、産業教育の理念に基いた問題のとり上げ方に、一貫したものがないのは、画龍点睛を欠くといえようか。

○

とはいへ、産業教育の課題解決に当るものは学校自体である。文部省の命令をまつている時代ではない。こうした資料を実際家が掘り下げて、活用していくようにありたいと思う。そうした意味で、本書を一応は読まれるよう望むものである。（A5判三七八頁、価五〇〇円、雇用問題研究会）

x x x

職業教育研究会支部規定

一、支部は会員の同志的親睦と職業科教育の推進を図るため、地域在住の会員によつて自主的に結成されるもので、本部よりは、何等の制肘を受けるものではない。

二、支部は都・市・区を単位とし、五名以上の会員によつて組織される。（本研究会著作教科書採用校は一名を会員と見なす）

三、支部は、支部名・支部代表者・組織会員名を本部に報告し本部より機関誌毎号五部宛の無代配布を受ける。但しそれ以上は会費納入を要す。

四、支部規約及び運営は支部の自由とし、解散した場合はその旨を本部に報告する。

五、支部で計画される研究会・講演会等には本部より講師を派遣指導に当る。

東京都千代田区一ツ橋
教育会館内

職業教育研究会

研究会だより

B6判では、雑誌らしくないとの批評にこたえて、本号からいよいよA5判にしました。それでもまだうすいものですが、現在の財政では、せい一ぱいの所です。はじめからこんなことをいたくないのですが、どうか会費（誌代）もぜひお送り下さつて応援協力を願います。

またA判になると、従来よりも、うんと原稿が入用になります。何でもよい、自分の会誌として、思いついたことを原稿にして寄せて下さい。

○
本号では、三月就職期を控えて、職業指導の問題を大きく扱いました。

後藤氏の言葉にもあるように、三月卒業間近になつてあわてて職業指導を持ち出すのはジャーナリズムならともかく、教育的にはどうかと思ひます。これらは、やがて来るべき新学期からの心構えに外なりません。

後藤氏は、すでに十数年間職業指導に没頭し、現在、大分大学でやがて教職につく生徒たちを指導されていますが、大分県下の中学

校の職業指導にも力を注いでいられる一方、従来の職業指導観を脱却して新しい境地を切り開こうとしていられる。その結晶が近く宮城県小野指導主事との共著で出版されます。

甲府西中学校の古屋正賢氏から貴重な原稿をいただきながら、附記したような事情で、全く外的な制限によるとはいへ、同校の全教職員の方々の苦心と創意を十分現わし得なかつたことを、心からおわびいたします。

それでもページ数では、本誌の約半分に近いもので、大いに重視したつもりです。これだけでも読者各位に多くの示唆をあたえるだろうと思ひます。

○
海外資料として、文部省の長谷川氏がソ連の最近の雑誌からポリテフニズムの動向を紹介して下さいました。日本の教育雑誌にはまだどこにも紹介されていないものです。別に本研究会でとりよせているアメリカの雑誌から、ボストン市のインダストリアル・アーツを紹介した原稿ができていますが、ページ数の都合で次号にゆずりました。

○
昨冬十二月廿六、七の両日、東京で開催した本研究会主催の冬期研究協議会の主題とし

た研究コースを発表します。大分ばう大なるのですが、こつこつと何年かかつてもやりとげなくてはならない課題です。それによつて職業家庭科教育が前進するばかりでなく、日本の全教育が進歩すると思ひます。

教育の改革発展は、社会の改革発展なくして期せられないことは、現実にいやというほど見せつけられています。それには教育者の実力と自信が必要であり、社会改革の進展にも役立つのではないでしようか。小さくちぢこまつていくことは、教育の敗北にほかなりません。

とまれ、問題多き一九五三年です。共に一歩一歩道を切り開いていきましょう。

昭和23年1月31日印刷
昭和23年2月5日発行

【金二十円】

編集兼
発行者 池田種生

東京都千代田区一ツ橋
教育会館

発行所 職業教育研究会

振替東京七七一七六番

新大陸への扉は開かれた！ ブラジルへ志す人に贈る二大名著

(好評発売中)

本間剛夫著

ブラジル

写真豊富美本
A5版200ページ
定価 ¥ 二八〇・四四〇

—— 図書館協会選定図書 ——

著者はさきに長篇小説「望郷」を公けにして文壇にデビューした新進作家。ブラジル在住十一年。各界より賞讃されたブラジル紹介の名著。

石川達三先生評

戦後数年、ブラジルはまた新しく日本人の関心を惹くようになつた。私は二十年まえの文化に遅れた農業国ブラジルの姿しか知らなかつた。ところが近ごろは工業が長足の進歩をとげ、大なる天然資源が開発され、むしろ工業国として世界の重要な地位を占めつつあるということだ。したがつて、今後ブラジルに渡る日本人の仕事の分野も大いにひろがつたわけである。

著者本間君は永年ブラジルに住んで見聞も豊富であり、作家だけに文章も明快だ。本書は学生の参考書としてもまた海外発展を志す人々の指南の書としても、格好のものである。

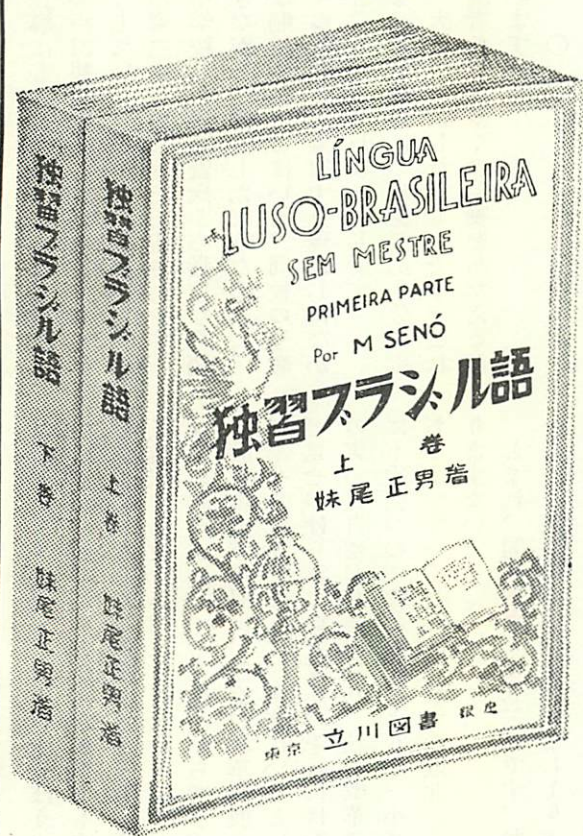
妹尾正男著

独習 ブラジル語

上・下二巻完結・各巻A5版三百二十ページ
フランスとじ。美本 定価 ¥ 六〇〇・四四五〇

著者は東京外語卒、同校講師を経てブラジルに渡り在任二十二年その間「ブラジルの国語講座」を著して不朽の金字塔を打ちたてたブラジル語の権威者。

内容はほんとうの初歩から発音、文章の種類、文の組み立て、訳読について各課ごとにいくつもの例をあげ、手紙の書きかた、新聞の読みかたまで進めてある。



発行所 立川図書株式会社 東京銀座東5~5
振替 東京 八三三 一四番